

琉球大学学術リポジトリ

特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の学習態度と技能習得の実態 ～琉球大学学生への質問紙調査結果から～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2009-06-05 キーワード (Ja): 特別支援教育, 教員養成, 技能習得 キーワード (En): 作成者: 田中, 敦士, 神園, 幸郎, 緒方, 茂樹, 大沼, 直樹, 片岡, 美華, 雲井, 未勸, 内田, 芳夫, Tanaka, Atsushi, Kamizono, Sachiro, Ogata, Sigeki, Onuma, Naoki, Kataoka, Mika, Kumoi, Miyoshi, Uchida, Yoshio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10755

特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の 学習態度と技能習得の実態

～琉球大学学生への質問紙調査結果から～

田中 敦士¹ 神園 幸郎¹ 緒方 茂樹¹ 大沼 直樹¹
片岡 美華² 雲井 未歆² 内田 芳夫²

The Learning Attitude and Acquiring Skills in College Students of
Special Needs Education Course; Results of a Questionnaire Survey of
Students in University of the Ryukyus

Atsushi TANAKA¹ Sachiro KAMIZONO¹ Sigeki OGATA¹ Naoki Onuma¹
Mika KATAOKA² Miyoshi KUMOI² Yoshio UCHIDA²

要 旨

琉球大学および鹿児島大学では、平成19年10月より、専門職大学院等教育推進プログラム「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成」を実施している。理論と実践とが調和し、常に自己点検と資質向上に努められるような教員を養成することを目指す事業である。本稿では、学生の学習行動や技能習得の実態や大学に期待するサービス等について、学生に対する質問紙調査の結果の概要を紹介した。事業開始前の学生の実態を把握するものである。その結果、深く学びたいと思ってもそのまま放ってしまう学生やどうしたらいいのかわからないという学生が少なくないこと、障害のある子どもと関わる時に必要な特別な技能があまり身につけていないと感じる学生が多いことなどが明らかとなった。

キーワード 特別支援教育 教員養成 技能習得

I はじめに

琉球大学および鹿児島大学では、教員養成における専門的人材育成の課題の解決に向け、専門職大学院等教育推進プログラム（専門職 GP）に応募、採択された。事業名は「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成プログラム」（主幹校：鹿児島大学）である。理論と実践とが調和し、常に自己点検と資質向上に努められるような教員を養成することを目指すことを事業目的とした。事業

期間は平成19年10月～平成21年3月である。

本事業では、①特別支援教育のためのカリキュラムの充実、②地域と連携した特別支援教育プログラムの開発、③オンラインポータルフォリオと補習メディアシステムの構築、の3点を主要な事業内容としている。

事業の実施にあたり、学生の実態をまず把握し、学生の学習態度の現状や大学への多様なニーズなどを整理することを主な目的として、両大学の特別支援教育を専攻する教員養成課程の学生を対象にした意識調査を実施した。今回はその調査結果について、琉球大学の学生回答分のうち、量的データの分析結果について報告する。

¹ University of the Ryukyus

² Kagoshima University

II 方法

1 対象

琉球大学教育学部障害児教育専修の学部学生を対象とした。在籍学生の内訳は、学部生48名（1年－12名 2年－13名 3年－11名 4年－14名）であった。なお、専攻科および大学院生に対しては説明・周知のための機会が十分になかったため、今回の分析対象からは除外した。

2 手続き

本事業における学生へのサービスとして、事業開始前のプレテストと位置付けて、平成19年11月中旬に調査票を学生に配布した。学年ごとに指導教員らが説明会を開いて調査の趣旨や目的を説明したほか、学科掲示板等で対象学生に調査への協力を繰り返し呼びかけた。学生には責任を持った回答を期待するため調査は記名式とし、個人が特定される形式で実施した。ただし、事務補助員によるローデータ入力の段階で氏名は削除し、個人と回答内容を照合することはないように配慮した。

3 調査内容

調査項目は、フェースシートのほか、専門的知識の習得度・学習行動、特別な技能の必要性・習得機会、卒業後の進路希望、大学に期待するサービスなどから構成される。鹿児島大学、琉球大学とも共通の調査票を用いて実施した。

III 結果と考察

1 回答学生の内訳

有効回答者について学年別にみると、学部1、2年次の回答者が多かった（表1）。これは実施時期の問題がある。文部科学省からの事業採択通知の時期が10月と遅かったため、卒業研究の佳境に差し掛かった時期（11月）に調査を実施せざるを得ず、記入負担の大きい調査に学生の協力が十分に得られなかった。なお、卒業研究や学年末試験が終了した2月に入り、追加回答が多数あったが、事業の pre-test としての意味合いもあることから、今回は分析対象から外すこととした。学部在籍学生48名のうち、41名から有効回答が得ら

れ、回収率は85.4%であった。性別では表2の通り、6割以上を女性が占めた。

表1 回答者の学年別内訳

学 年	人	(%)
1 年	10	(24.4%)
2 年	12	(29.3%)
3 年	6	(14.6%)
4 年	8	(19.5%)
無回答	5	(12.2%)
計	41	(100.0%)

表2 回答者の性別内訳

性 別	人	(%)
男	16	(39.0%)
女	25	(61.0%)
計	41	(100.0%)

2 専門的知識の習得度

「これまで受けてきた講義や演習を通して、専門的知識が身についていると思いますか？」の回答結果を表3に示した。「十分身についている」という者はまったくいない一方で、「あまり身につけていない」という学生が約1/4を占め、講義や演習のあり方に疑問を持つ者が少なくないことも示唆された。「どちらともいえない」も1/3以上を占めており、講義や演習だけでは自信にまではつながらないことが明らかとなった。

表3 「これまで受けてきた講義や演習を通して、専門的知識が身についていると思いますか？」の回答結果

性 別	人	(%)
全く身につけていない	0	(0.0%)
あまり身につけていない	11	(26.8%)
どちらともいえない	15	(36.6%)
ある程度身につけている	14	(34.1%)
十分身につけている	0	(0.0%)
無回答	1	(2.4%)
計	41	(100.0%)

3 深く学びたいと思った時の学習行動

「深く学びたいと思った時に、あなたはどのような行動に移すことが多いですか？以下の行動について、選択肢の中からあてはまる番号を記入してください。」という質問に対して、それぞれの行動ごとに回答をまとめた。

(1) 「大学の先生に聞きに行く」

「よくある」と「少しある」の合計が約4割みられた一方で、「あまりない」と「まったくない」を合わせて約半数を占めた。相談によく来る学生とそうでない学生とに大きく分かれる印象が近年あったが、今回の調査ではっきりと裏付けられた。後者については、どのような要因でなかなか聞きに来られないのかを探る必要が今後あるだろう。

表4-1 深く学びたいと思った時に、「大学の先生に聞きに行く」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	7 (17.1%)
あまりない	13 (31.7%)
どちらともいえない	2 (4.9%)
少しある	11 (26.8%)
よくある	5 (12.2%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(2) 「友達や先輩に聞く」

「よくある」と「少しある」の合計が約8割を占めた。このことから、先輩が後輩にスーパーバイズしやすい環境の整備をすることが、学生の学習意欲を喚起する上で効果的であると考えられた。グループ学習を積極的に導入したり、ティーチング・アシスタント(T. A.)に明確な役割を与えて学生に周知したりして、効果的に活用することが大切であろう。

表4-2 深く学びたいと思った時に、「友達や先輩に聞く」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	2 (4.9%)
あまりない	0 (0.0%)
どちらともいえない	4 (9.8%)
少しある	20 (48.8%)
よくある	12 (29.3%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(3) 「本や雑誌を買って読む」

「よくある」と「少しある」の合計が約半数を占めたが、「まったくない」も1割程度を占めていた。沖縄県の場合は、子どもの頃からの読書習慣の乏しさや家庭の経済的状況も一因として考えられるだろう。しかし、大切な金で買った本はきちんと読んで勉強する学生が経験的に多いことから、あまり本を買わない学生への指導のあり方も再考する必要があるだろう。

表4-3 深く学びたいと思った時に、「本や雑誌を買って読む」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	6 (14.6%)
あまりない	5 (12.2%)
どちらともいえない	7 (17.1%)
少しある	13 (31.7%)
よくある	7 (17.1%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(4) 「書籍等を借りて調べる」

「あまりない」と「まったくない」を合わせた合計は22.0%を占めた。このことから、本を読まないのは経済的な問題ではなく、学生の学習態度や意欲により大きな問題があることが示唆された。

表4-4 深く学びたいと思った時に、「書籍等を借りて調べる」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	4 (9.8%)
あまりない	5 (12.2%)
どちらともいえない	8 (19.5%)
少しある	15 (36.6%)
よくある	6 (14.6%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(5) 「インターネットで調べる」

「よくある」と「少しある」の合計が6割を超え、多くの学生がITに慣れ親しんでいることが示された。インターネットは生活にも密着した身近な情報収集の手段となっているが、その活用方法に関してはまだ検討の必要がある。今回の調査では明らかとなっていないが、卒業研究での文献検索において、googleやYahooなどの検索サイトでしか調べず、専門的な文献データベースを活用していない学生が少なからずみられるからである。レポートについても、あるサイトからの丸写しと思われるようなものを目にすることもある。インターネットをどのように活用して、いかに必要な情報を取得するか、そのモラルも含めて方法論から系統的に指導する必要があるだろう。

表4-5 深く学びたいと思った時に、「インターネットで調べる」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	1 (2.4%)
あまりない	3 (7.3%)
どちらともいえない	8 (19.5%)
少しある	15 (36.6%)
よくある	11 (26.8%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(6) そのまま放っておく

「よくある」と「少しある」の合計が26.9%もみられた。せっかく講義などで深く学びたいとモチベーションを喚起しても、自ら学ぼうとしない学生がかなり大学に存在していることが明確となっ

た。これは特別支援教育に限らず、大学教育の危機であると言ってよい。大半が将来教員を目指す学生であるからなおさら大変な事態である。深く学びたいという意欲があっても、なぜ放っておいてしまうのだろうか。学び方の方法が分からないのか、単に無気力であるのか、あるいはその他の原因があるのか、その究明が早急に必要である。

表4-6 深く学びたいと思った時に、「そのまま放っておく」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	4 (9.8%)
あまりない	10 (24.4%)
どちらともいえない	13 (31.7%)
少しある	7 (17.1%)
よくある	4 (9.8%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

(7) どうしたらいいのかわからない

「よくある」と「少しある」の合計が4割を超え、かなりの学生が勉強の仕方から知らないことが推察された。以前の国立大学には助手（現在の助教）が学生にとって身近な助言者であった。大学における授業や研究の意味、情報の調べ方やレポートの書き方、文献検索や図書館の利用法、研究の進め方や分析の仕方など、以前は助手が総合的なコーチング役となっていた。助手を削減した弊害がまさに表面化していると言える。博士後期課程まで設置されている大学ならティーチング・アシスタントの人材も豊富であろうが、修士課程の院生では、ティーチング・アシスタントとしてできる範囲も限定されてしまう。改めて学生へのコーチング役を果たすような専門職が必要とされていると言えるだろう。本事業では、平成20年度にコーチング研究員を1名雇用し、コーチングチームを設置して学生の指導にあたらせている。この効果についても今後検証したい。

表4-7 深く学びたいと思った時に、「どうしたらいいのかわからない」の回答結果

性別	人 (%)
まったくない	9 (22.0%)
あまりない	5 (12.2%)
どちらともいえない	6 (14.6%)
少しある	16 (39.0%)
よくある	2 (4.9%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

4 特別な技能

(1) 特別な技能の必要性

「障害のある子どもと関わるときに、障害のない子どもたちに対する時とは異なる、特別な技能(指導法や関わり方など)が必要だと思いますか?」の回答結果を表5に示した。「必要である」と「やや必要である」の合計が8割を超え、大半の学生が障害のある子どもと関わるときに特別な技能を必要としていることを認識していた。

表5 「障害のある子どもと関わるときに、障害のない子どもたちに対する時とは異なる、特別な技能(指導法や関わり方など)が必要だと思いますか?」の回答結果

性別	人 (%)
全く必要でない(障害のない子どもと同じでよい)	0 (0.0%)
あまり必要でない	2 (4.9%)
どちらともいえない	5 (12.2%)
やや必要である	18 (43.9%)
絶対必要である	16 (39.0%)
計	41(100.0%)

(2) 特別な技能の習得度

「あなたは、前問であげた特別な技能を身につけていると思いますか?」の回答結果を表6に示した。「十分に身につけている」はひとりもおらず、「あまり身につけていない」と「全く身につけていない」の合計が約4割を占め、多くの学生が特別な技能をまだ習得していないと認識していた。

表6 「あなたは、前問であげた特別な技能を身につけていると思いますか?」の回答結果

性別	人 (%)
全く身につけていない	2 (4.9%)
あまり身につけていない	14 (34.1%)
どちらともいえない	19 (46.3%)
ある程度身につけている	6 (14.6%)
十分身につけている	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)
計	41(100.0%)

(3) 特別な技能の習得方法

「その特別な技能は、どこで身についたと思いますか?」という質問に対し、以下の項目ごとに回答を求め、表7-1~表7-6に示した。

「教育実習を通して身についた」については、「まったくあてはまらない」と「あまりあてはまらない」で約4割を占めた。これは学部生全学年を対象としているため、1、2年次が否定的な回答をしたことによると思われる。しかし、1、2年次に対して実施している教職体験では、障害のある子どもと関わる時に必要な特別な技能は習得できないことを意味するものでもあり、今後教職体験の在り方についても検討の余地がある。

なお、障害児教育専修では、1年次に対して9月の夏季休暇中に特別支援学校等を5日間かけて授業見学する「障害児教育観察」という授業科目を設けている。休み時間中に障害児と少し接することは可能であるが、授業見学を主体とするものであるため、特別な技能の習得までは期待できないものである。正課の中で特別な技能の習得をどのレベルまで目指すべきであるのかについては、今後カリキュラムの改正に向けて慎重に検討する必要がある。

表7-1 その特別な技能は、「教育実習を通して身についた」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	9 (22.0%)
あまりあてはまらない	7 (17.1%)
どちらともいえない	6 (14.6%)
少しあてはまる	7 (17.1%)
よくあてはまる	6 (14.6%)
無回答	6 (14.6%)
計	41(100.0%)

「ボランティアなどの活動を通して身についた」については、9割以上が肯定的な回答を示した。特別な技能の習得にはもっとも効果的な活動である。障害児教育専修の学生は大半の者が1年次からボランティアに参加している。学生が主体となって毎週土曜日に定期的実施しているボランティアサークルは長い伝統があり、この活動を通して実践的なスキルを身につけている学生が多い。また、夏休みには、肢体不自由児らとキャンプに行くという活動も定例化している。これはYMCAが主催となっているが、事実上障害児教育専修の学生が企画・運営までを手掛けている。キャンプ当日の関わりだけでなく、学生同士で何度もミーティングを繰り返し、長い準備期間を必要としているものである。この活動もまた、教員を目指す上で有意義なものであると言える。これら2つの活動はいずれも学生が自主的に行うもので、大学の正課とは関係のないものであるが、キャンプの日程や活動にはできる限りの配慮をして、活動に支障がないよう教員も応援している。

表7-2 その特別な技能は、「ボランティアなどの活動を通して身についた」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	0 (0.0%)
あまりあてはまらない	0 (0.0%)
どちらともいえない	1 (2.4%)
少しあてはまる	19 (46.3%)
よくあてはまる	19 (46.3%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

「大学の講義や演習を通して身についた」については、約半数の学生が肯定的な回答をしていた。これは予想以上に高い結果であり、実践的な授業が多くなっていることの裏付けでもあるが、否定的な回答も約2割あり、学生の捉え方も割れていると見るのが無難であろう。

表7-3 その特別な技能は、「大学の講義や演習を通して身についた」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	3 (7.3%)
あまりあてはまらない	5 (12.2%)
どちらともいえない	11 (26.8%)
少しあてはまる	17 (41.5%)
よくあてはまる	3 (7.3%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

「幼い頃から同級生や親族等に障害のある人がいて自然に身についた」については、あてはまるとしたのは2割にしか過ぎなかった。身近な関わりが勉学意識を高めることは確かであろうが、それだけに期待していても特別な技能の習得には至らない。大学が体系的なカリキュラムを提供することが必要不可欠であろう。

表7-4 その特別な技能は、「幼い頃から同級生や親族等に障害のある人がいて自然に身についた」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	0 (0.0%)
あまりあてはまらない	0 (0.0%)
どちらともいえない	1 (2.4%)
少しあてはまる	19 (46.3%)
よくあてはまる	19 (46.3%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

「なんとなく身についた」については、あてはまると答えた者は1割強にしか過ぎなかった。特別な技能は、意識的に、かつ計画的に習得させることが必要であろう。

表7-5 その特別な技能は、「なんとなく身についた」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	15 (36.6%)
あまりあてはまらない	10 (24.4%)
どちらともいえない	7 (17.1%)
少しあてはまる	5 (12.2%)
よくあてはまる	1 (2.4%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

「そもそも身につけていないと思う」は約4人に1人が肯定した。自信の持てない学生が少ないことの裏返しである。今後はこうした学生に対するきめ細やかなサポートが特に必要となろう。

表7-6 その特別な技能は、「そもそも身につけていないと思う」の回答結果

性別	人 (%)
まったくあてはまらない	15 (36.6%)
あまりあてはまらない	10 (24.4%)
どちらともいえない	7 (17.1%)
少しあてはまる	5 (12.2%)
よくあてはまる	1 (2.4%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

全体を通して、よくあてはまると答えた割合がもっとも高かったのは、「ボランティアなどの活動を通して身についた」であった。次いで、「教育実習を通して身についた」、「幼い頃から同級生や親族等に障害のある人がいて自然に身についた」、「大学の講義や演習を通して身についた」と続いた。

5 大学で学んだ理論や知識の活用

「あなたは、障害のある子どもたちと関わるときに、大学で学んだ理論や知識をどれくらい活用することができた（できている）と思いますか？」に対する回答は、20%以上30%未満が26.8%ともっとも多かった。ただし50%以上と答えた者も3分の1を超えており、学生によってかなりのばらつきがみられた。実践において、理論や知識がどの

ように活用されるのかということまで、授業で学生に丁寧に解説することが今の教員には求められている。しかし、授業時間内では十分に消化できない学生も多いと思われるので、別の形でサポートすることも今後検討が必要であろう。

表8 あなたは、障害のある子どもたちと関わるときに、大学で学んだ理論や知識をどれくらい活用することができた（できている）と思いますか？

性別	人 (%)
10%未満	3 (7.3%)
10%以上20%未満	2 (4.9%)
20%以上30%未満	11 (26.8%)
30%以上40%未満	6 (14.6%)
40%以上50%未満	4 (9.8%)
50%以上60%未満	6 (14.6%)
60%以上70%未満	4 (9.8%)
70%以上80%未満	3 (7.3%)
80%以上90%未満	0 (0.0%)
90%以上100%未満	1 (2.4%)
無回答	1 (2.4%)
計	41(100.0%)

6 進路希望

「あなたは、教師になりたいですか？」の回答結果を表9に示した。過半数が特別支援学校と答えた。普通学級の教師を希望する学生も2割を超え、特別支援教育の本格実施により、学生の進路にも多様な考え方が生まれつつあることが示された。なお、教職以外の職に就きたいとする学生はいなかった。

表9 「あなたは、教師になりたいですか？」の回答結果

性別	人 (%)
特別支援学校の教師になりたい	21 (51.2%)
特別支援学級の教師になりたい	4 (9.8%)
普通学級の教師になりたい	9 (22.0%)
その他の教師になりたい	4 (9.8%)
教職以外の職に就きたい	0 (0.0%)
無回答	3 (7.3%)
計	41(100.0%)

7 大学に期待するサービス

「本学では将来的に以下のようなサービスを提供できないか検討しています。そこで、各サービスについて、どの程度期待したいか」という質問を行った。8つのサービスに対する期待度を5段階で回答を求め、その結果を表10-1～表10-8に示した。そして、各サービスに対する「とても期待する」と「少し期待する」の合計割合を図1にまとめた。

学生がもっとも期待していたのは、「現場で実際に働いている人（教師、作業療法士、医師など）や当事者（障害のある人や家族）が、大学の演習で経験を話してくださるサービス」であり、85.4%に上った。これは、本事業における講義でのゲストスピーカー招聘に相当し、今年度からすでに実施したものである。具体的に予告したこともあって、非常に高い期待を集めたのではないかと推察される。

一方、もっとも期待度の低かったのは、「自分が授業や教育実習を通して身につけた知識や力量（技量）がグラフ等で分かりやすく表されるサービス」であり、29.3%にすぎなかった。本事業で開発を手がけているオンラインポートフォリオが、まだ学生には馴染みがなく、わかりにくいものであるためと考えられた。実際に開発、運用を行うなかで、期待度も徐々に上がっていくのではないかと推測される。

実践経験を定期的に積むことのできる講義・学生支援員派遣制度や、授業を自宅で復習できるビデオライブラリ、先輩等に気軽に相談できるようなコーチングチームの体制づくりなど、本事業を通して提供を予定しているそれ以外のサービスについては、いずれも期待度が50%を超えており、事業のなかで計画通りに実施してよいものと考えられた。

表10-1 「インターネット上にある授業のビデオを見て、家で復習できるサービス」への期待の回答結果

性 別	人	(%)
まったく期待しない	1	(2.4%)
あまり期待しない	9	(22.0%)
どちらともいえない	3	(7.3%)
少し期待する	10	(24.4%)
とても期待する	15	(26.6%)
無回答	3	(7.3%)
計	41	(100.0%)

表10-2 「現場で実際に働いている人（教師、作業療法士、医師など）や当事者（障害のある人や家族）が、大学の演習で経験を話してくださるサービス」への期待の回答結果

性 別	人	(%)
まったく期待しない	0	(0.0%)
あまり期待しない	2	(4.9%)
どちらともいえない	2	(4.9%)
少し期待する	7	(17.1%)
とても期待する	28	(68.3%)
無回答	2	(4.9%)
計	41	(100.0%)

表10-3 「自分が授業や教育実習を通して身につけた知識や力量（技量）がグラフ等で分かりやすく表されるサービス」への期待の回答結果

性 別	人	(%)
まったく期待しない	11	(26.8%)
あまり期待しない	8	(19.5%)
どちらともいえない	8	(19.5%)
少し期待する	9	(22.0%)
とても期待する	3	(7.3%)
無回答	2	(4.9%)
計	41	(100.0%)

表10-4 「理論を勉強する中でわからないときに、どんな勉強をしたらいいかを大学の先生や大学院の先輩に相談できるサービス」への期待の回答結果

性別	人 (%)
まったく期待しない	1 (2.4%)
あまり期待しない	7 (17.1%)
どちらともいえない	4 (9.8%)
少し期待する	12 (29.3%)
とても期待する	15 (36.6%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

表10-7 「教員になってから、勤務校にいなからTV会議システムを通じて講習などに参加できるサービス」への期待の回答結果

性別	人 (%)
まったく期待しない	1 (2.4%)
あまり期待しない	4 (9.8%)
どちらともいえない	11 (26.8%)
少し期待する	11 (26.8%)
とても期待する	12 (29.3%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

表10-5 「実際の学校に定期的に入って、実践経験を積むことができるサービス」への期待の回答結果

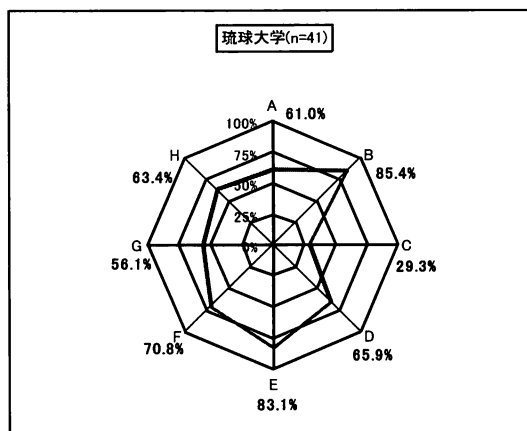
性別	人 (%)
まったく期待しない	0 (0.0%)
あまり期待しない	1 (2.4%)
どちらともいえない	4 (9.8%)
少し期待する	12 (29.3%)
とても期待する	22 (53.7%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

表10-8 「教員になってから、インターネット上にある大学の授業を見ることができサービス」への期待の回答結果

性別	人 (%)
まったく期待しない	2 (4.9%)
あまり期待しない	5 (12.2%)
どちらともいえない	6 (14.6%)
少し期待する	11 (26.8%)
とても期待する	15 (36.6%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)

表10-6 「学生時代に実践場面（教育実習やボランティアなど）でわからないことがあったときに、現場の先生などに相談できるサービス」への期待の回答結果

性別	人 (%)
まったく期待しない	2 (4.9%)
あまり期待しない	3 (7.3%)
どちらともいえない	5 (12.2%)
少し期待する	17 (41.5%)
とても期待する	12 (29.3%)
無回答	2 (4.9%)
計	41(100.0%)



- A インターネット上にある授業のビデオを見て、家で復習できるサービス
- B 現場で実際に働いている人（教師、作業療法士、医師など）や当事者（障害のある人や家族）が、大学の履修で経験を話していただけるサービス
- C 自分が授業や教育実習を通して身につけた知識や力量（技能）がグラフ等で分かりやすく表されるサービス
- D 理論を勉強する中でわからないときに、どんな勉強をしたらいいかを大学の先生や大学院の先輩に相談できるサービス
- E 実際の学校に定期的に入って、実践経験を積むことができるサービス
- F 学生時代に実践場面（教育実習やボランティアなど）でわからないことがあったときに、現場の先生などに相談できるサービス
- G 教員になってから、勤務校にいなからTV会議システムを通じて講習などに参加できるサービス
- H 教員になってから、インターネット上にある大学の授業を見ることができサービス

図1 各サービスに対する「とても期待する」と「少し期待する」の合計割合

IV おわりに

本稿では、学生の学習行動や技能習得等の実態について、学生に対する質問紙調査の結果の概要を紹介した。今回取り上げた調査は事業開始前の学生の実態を把握するものであった。

特別支援教育に関する知識や実践力は、ある程度までは講義や演習を通して身につけることのできる事項である。しかし、これらの能力は目にはっきり見えるものではなく、学生にとっても回答にしにくいものであったかもしれない。しかし、この調査を通して、学生も改めて現在の自分自身を見つめ、教職を目指す上での認識を新たにするよい機会になったのではないかと考えられる。

特別支援教育を担う教員として、学生が理想を求めれば求めるほどより高い資質を追求し、結果として自分の力の至らなさや未熟さを感じるのも事実であろう。本事業では、オンラインポートフォリオを開発することで、学生が習得した専門性をできるだけ可視化し、彼らが達成感を味わいながら、次の目標へ進むことを目指している。学生が教職を目指す上で、現在どの程度の到達度であり何が足りないのかを示唆する有効なツールではないかと考えている。オンラインポートフォリオの試行運用を現在行っているところであるが、今後その検証も行っていく予定である。

また、昨年度より現場の教員や実践家を招いて、ゲストスピーカーとして「障害児基礎演習」の授業などでお話いただいた。今回の調査結果からも明らかとなったように、学生のニーズとしてはとても高いものであった。こうした取り組みに対する学生の評価や満足度についても、今後検証していく予定である。

付 記

本稿は、平成19年度専門職大学院等教育推進プログラム採択事業「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成～オンラインポートフォリオによる理論・実践の融合と個別的学修プログラムの構築」中間実施報告書をもとに、琉球大学分の結果を抽出して、考察など加筆修正を加えたものである。調査に協力いただいた学生の皆さんに感謝したい。

参考文献

- 鹿児島大学・琉球大学・鹿児島県教育委員会・沖縄県教育委員会（2008）平成19年度専門職大学院等教育推進プログラム採択事業「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成～オンラインポートフォリオによる理論・実践の融合と個別的学修プログラムの構築」中間実施報告書
- 神園幸郎・田中敦士・片岡美華・雲井未歎・内田芳夫（2008）特別支援教育の教員養成課程で学ぶ学生の大学に期待するサービス；文科省GP「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成」日本特殊教育学会第46回大会発表論文集，666-666.
- 片岡美華・田中敦士・鳥居朋子（2008）特別支援教育教員の専門性；学生の意識調査の結果からみた現状と課題 SNE 学会第14回大会発表論文集，70-71.
- 田中敦士・神園幸郎・片岡美華・雲井未歎・内田芳夫（2008）特別支援教育の教員養成課程で学ぶ学生の学習行動と技能習得の実態；文科省GP「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成」日本特殊教育学会第46回大会発表論文集，665-665.